あとがき

本誌『東アジア文化交渉研究』は創刊以来10年を迎えた。2007年に文部科学省よりG-COEプログラム関西大学文化交渉学教育研究拠点に選定されたことを契機に、関西大学大学院文学研究科に新たに文化交渉学専攻が設置され、本誌が創刊されることになった。それを、2011年に新設された東アジア文化研究科文化交渉学専攻を母体とする本誌が継承して6年になり、貴重な年月を重ねることになった。

文学研究科文化交渉学専攻、東アジア文化研究科文化交渉学専攻と創設以来担当教員であった松浦章教授が古稀を迎えられ、定年退職されることになり、本誌はその記念号として氏の略歴、研究業績一覧を収める形となった。氏は東アジアの船舶運航とその文化交渉に関して、東アジアのみならず、世界を代表する歴史家であり、その名声は津々浦々に鳴り響いている。

松浦章教授は、上記プログラムの推進担当者の一人として研究に邁進され、膨大な業績を積み上げられたのみならず、教育指導の面でも、文学研究科文化交渉学専攻、東アジア文化研究科文化交渉学専攻に所属した中国人6名、台湾人2名、日本人1名の9名の博士生を全て3年で課程修了させて世に送られた。この内の5名が大学教員となり、その一人はすでに副教授に昇進するなど、教育指導に圧倒的な成果を上げられた。松浦教授は、著書（単著）を中国語と英語の書籍合わせて36冊、共編書を22冊、学術論文を約350本執筆されており、その驚くべき全容は、本誌掲載の履歴書・業績書によってあらためて認知されることになろう。氏の学問的に厳しい指導は、逆にあまりにも優しい人柄に反映され、研究者としても、教育者としてもまことに素晴らしいリーダーだと言わねばならない。

この記念号には、松浦教授の2本の玉稿を含め、投稿論文が42本、研究ノートが5本の計45本が収録されている。その観点からいって、松浦教授の古稀を祝う本誌は、氏を送るにふさわしい大冊となったことを慶びたい。

さらに、第25回山片蟠桃賞を受賞されたベルギーのルーヴェン大学名誉教授のヴァン・ド・ワレ関西大学名誉博士の同賞受賞講演の原稿を「寄稿論文」として収めている。加えて、研究者の卵である若い大学院生たちの多くが投稿してきたことにも大きな意味がある。

本誌も文化交渉学の多岐にわたる諸相を鮮明に彷彿させる記念号となった。諸賢のご叱正を希う次第である。

（中谷伸生 記）